

古代史教養講座 創立1995

松戸市常盤平 2-18-9

〒270-2261 電話 (047)384-5728 <http://www.geocities.jp/kdi1995>

振込銀行口座 三井住友銀行 飯田橋支店 普通預金 6355550 口座名・古代史教養講座

本号は都合により2頁となります。**1月7日ゼミは中止します**

東京都のコロナ感染者数は、11月中旬から1か月以上、1万人を越える状況が続いています。

全国的にも、感染者は気温低下と共に北・東日本だけでなく、西日本も増加し第8波の到来です。

従来より、重症者や死者は減少しているようですが、高齢者が犠牲になる事には変わりません。又、首都圏では12月以降増加基調にあり、当会は、安全・安心第一の運営方針により、1月ゼミは中止とします。

尚、2月以降のゼミは、原則順延としますのでご承知下さい。

皆さん、朝日浴、体操、散歩で体力を維持し、快眠・快食・快便に努め、良き新年を迎えましょう。

2023年年会費の振り込みのお願い

古代史ニュース313号でご案内の通り、従来は個々の会員の入会月毎に、納金して頂いておりましたが、本年より入会月に拘わらず、一律1月に納金していただく事になりました。

就きましては、**本ページ最上段の古代史ニュース** 標題欄の最後の段に振込銀行名、支店名、普通預金口座番号、口座名が記してありますので、5千円方振り込みをお願いします。尚、下記の5名の会員は、既に2023年分年会費を入金済みです。

記

2023年年会費を入金済みの会員(敬称略)

浅井 壮一郎。川又 宏子。坂本 洋子。宮内 知有。宮川 哲雄。以上。

『卑弥呼の朝貢』

—槌田 鉄男会員記—

卑弥呼の朝貢での明帝の詔は非常にリアルに書か

れています。三国志をベースにウィキペディアを参考にしながら自説の新しい騎馬民族説に沿って朝貢にいたるまでの経緯を語ってみたいと思います。

1、難升米の戸惑い

景初2年(238年)12月、難升米は魏の明帝(曹叡)の面前で、とんでもない所に来てしまったと身震いをしていた。こんなことになるとは想像もしていなかったのだ。こうなると分かっていたら、もっと豪勢な貢物を持参し、もっと多くの供を従えて来たものをも思っていた。

ことの発端は扶余の横暴にある。扶余の北部九州への侵略は2世紀末から始まり、すでに半世紀近く経っているが、このところ激しさを増していた。窮した卑弥呼は扶余の横暴を時の支配者である公孫淵に訴えようと難升米を帯方郡に送ったのだ。しかし、公孫淵はそこにはいなかった。代わりにいたのは明帝が送った太守・劉夏だった。景初2年6月のことである。何故、魏の太守がここに？その理由を知る由もなく戸惑う難升米を劉夏は魏の都・洛陽まで誘い明帝に拝謁させることにした。

卑弥呼の使い難升米が魏の明帝に拝謁した場面を自説の“新しい騎馬民族説”に沿って再現するとこのようになります。いきさつをもう少し掘り下げてみましょう。

2、第4の勢力

邪馬台国の時代(2世紀後半～3世紀中頃)、中国は戦乱の世であった。後漢王朝は衰退してしまい魏、呉、蜀の3国は激しい戦いを繰り返していた。それは後漢の全盛期に5649万人だった人口が、三国合わせて767万人と7分の1以下になってしまったと言うことから分かる(『貝と羊と中国人』から)。これは王朝の腐敗に加え181年のニュージーランドのタウポ火山の大爆発に端を発した世界的な大飢饉が原因であり、さらに184年に発生した黄巾の乱が王朝の衰退を決定的なものにした。

そして、三国以外の4番目の勢力、遼東の公孫氏にも注目しなければならない。この勢力を中心に中国東

北部は大きなうねりとなっていた。この遼東公孫氏で最初に歴史に登場したのは公孫度と言う人物だ。彼の父親は玄菟太守の公孫域いさに官僚として仕えていた。公孫域は早死にした子の名前と公孫度の幼名「豹」が同じだったことから彼を可愛がり、彼はその援助のもと学問を学び後漢の官僚になり 189 年に遼東太守になった。破格の出世である。彼は後漢の衰退に伴う中原の争乱を横目に見ながら敵対する周囲の有力者を滅ぼし、独立色を強め、台頭する高句麗うがんや烏桓などを討伐し、遼東の覇者となっていた。そして彼の後を継いだ長男の公孫康は朝鮮半島南下策を積極的に進め、建安9年(204年)に現在のソウル近くと推定される場所に帯方郡を設置し、韓だけでなく倭をもその配下に置いた(魏志韓伝)。公孫康は東北アジアにおける公孫氏の力を不動のものにしたと言える。

魏志倭人伝には伊都国の説明に『郡使の往来に常に駐まる所なり』とあるが『郡使』とはこの帯方郡からの使いのことだ。帯方郡は難升米が劉夏に会う直前まで公孫氏のものであり、公孫氏の使いが日本に頻繁にきて伊都国に留まっていたことになる。卑弥呼が朝貢するまで日本は公孫氏が作った帯方郡の属国だった。

3、遼隧の戦い

公孫康の後を継いだのは弟の公孫恭である。彼は乱世の当時としては珍しく優しい人物だったようだ。子がおらず機能不全だったとも書かれているが実際の所は分からない。彼は魏にとって都合のいい人物ではあったが、公孫康の次男、公孫淵えんが成人すると太和2年(228年)に太守の座を奪われてしまう。

公孫淵は意欲的だった。呉とも通じ、233年呉から燕王に任じられているが、魏におべっかを使ったつもりだったのか呉の使者二人を殺害し、その首を魏に差し出しこんどは魏から楽浪公に任じられている。しかし、このような二股外交は魏にとって目障りな存在だった。234年、蜀の諸葛亮の死で余裕のできた明帝は毌丘儉かんきゅうけんに公孫淵を討つよう命じたが、彼は攻めきれず敗走してしまう。公孫淵は自立を宣言し、ついに自ら燕王を称した。

さらに檄した明帝は名将・司馬懿に4万の兵を与え公孫淵討伐を命じた。戦いを前に明帝はどのような策を取るのか司馬懿に尋ねている。司馬懿は「往路に100日、復路に100日、戦闘に100日、その他休養などに60日を当てるとして、1年もあれば充分でしょう」と答え、「(公孫淵が)城を捨てて逃げるが上策、遼水に拠って我

が大軍に抗するは次策、襄平じょうへいに籠もるなら生捕りになるだけです。彼が知恵者ならば、城を捨てることも有るでしょうが、彼はそんな策を考えつける人物ではありません」と答えている。

それを聞いた明帝は公孫淵の逃亡を恐れその背後を絶つ目的で、帯方郡に劉夏を差し向けたのだ。劉夏は遼隧りょうすいに向かった公孫淵に気付かれないよう密かに洛陽を出て山東半島から黄海を横切り船で帯方郡にやって来た。司馬懿の4万の軍隊と公孫淵の数万の軍隊が遼隧で対峙したのは景初2年6月のことであり劉夏はこの時までに帯方郡に到着していたはずだ。そしてちょうど同じタイミングで難升米も帯方郡に到着したということになる。難升米と同様に劉夏もこの時驚いたと思われる。今から戦火を交えようとする相手を訪ねて倭国から使者がやって来たのだ。魏にとって倭国は敵なのか味方なのか。公孫氏は呉と繋がっていた。倭国も呉と繋がっているかもしれない。難升米から事情を聞いた劉夏は、この倭国の使者をどう扱うか明帝に意向を問うたに違いない。明帝は難升米等を洛陽に招き、直接事情を聞くことにした。

難升米の朝貢に至る経緯はこのようなことだったと思われます。ことの発端となった扶余の倭国への来襲については次の機会に話したいと思いますが、遼隧での戦いの結末だけは追加しておきましょう。

4、遼隧の戦いの結末—公孫氏の滅亡

司馬懿は238年8月に公孫淵に勝利した。百戦錬磨の司馬懿に若い公孫淵が勝つはずもなかった。司馬懿は公孫淵親子だけでなく公孫氏一族の15歳以上の男子を皆殺しにして禍根を絶った。公孫淵を危険人物だと魏に進言した彼の兄の公孫晃こうさえも明帝によって誅殺されている。公孫氏一族はほぼ根絶やしになったが、魏に忠実だったと言うことで公孫恭のみは司馬懿によって許され生きながらえた。

後に孫権が差し向けた呉の援軍に公孫恭が助けられ、日本の古代史を一変させてしまうような事態を招くことになるのはこの時の司馬懿には想像もできなかった。その結末は拙著をご覧ください！

(参考文献)

- ・槌田鉄男『九州の邪馬台国vs纏向の騎馬民族』文芸社 2019年10月
- ・加藤徹『貝と羊と中国人』新潮社 2006年以上。